

サビエル高校の日々

発行人の揺籃「あとからジワジワ効いてくる」

◆たのしい通学生

1975 年にサビエル高校の 1 年生となった。自宅のある宇部の端っから 1 時間ほど電車で揺られれば小野田駅である。そこから 20 分くらい歩いて通学していた。

朝礼は週に 2 度あった。1 日はディアス校長の訓話。入学した年は国際婦人年で、それにまつわるお話が印象に残っている。あと 1 日は全員に楽譜が配られ陽気なマグダレナ先生の指導で歌を歌うコーラス朝礼。(そこは小磯良平画伯「斉唱」の少女たちを思い浮かべていただきたい……ダメ?)。賛美歌も歌ったが記憶に残っているのはメキシコの歌「シェルト・リンド」。楽しかったなあ。

当時は正課クラブという授業枠強制部活動があった。第一志望の謡曲クラブが人が集まらず中止になったので第二志望の英会話クラブに入ったのだが、夏休み明けのバザー(文化祭的な)で、シェイクスピアのベニスの商人第 4 幕(裁判場面)を演じた。私は高利貸シャイロック。古典英語長台詞に苦しむ。

放課後部活は写真部。中学から続けていた銀塩白黒写真紙焼きを行う。デジカメなどなかった時代で小遣いの大半が機材とフィルム代に消えていた。部活関連で読んだのが岩波新書『写真の読みかた』(名取洋之助著 1963 年刊まだ新本が入手できる)。写真はレイアウトとキャプションで伝わり方が全然変わってくることを頭に叩き込んだ。が、すぐに読書家にはならなかった。今は詐欺メイク自撮りというのが流行しているらしいが、当時私はたまに机の Z ライト(これがわかる人は古い)でのライティングを駆使して自撮りをしていた。あまりにもうまくできたのでバザーで展示したら、他校の写真部男子生徒たちが言った。「この写真のモデルを紹介してくれませんか」……えっと、君たちの目の前にはありますが何か。



◆授業と読書

岩波新書といえば、倫理社会のヒゲの神父様ルナ先生がテストの前に『人間はどこまで動物か』（アドルフ・ポルトマン著 1962 年刊これも今なお売られている）を読んでおきなさい、と言ったのでスナオに五十部誠文堂で買って読んで答案を書いたら良い点がもらえた。このあたりで読書するといいいことがある、と刷り込まれたのだが、すぐに読書家にはならなかった。



当時は大して本は読んでいなかった。というより私より多く読む子はいくらでもいた。長い小説はほとんど読んでなく上下巻を通して読んだのは唯一小松左京の『日本沈没』くらいである。現代国語の時間は「誰か読んで」と言われたとき大概手を挙げ毎回朗読していた。これは居眠り防止対策で起きている授業中は、姉の高校時代の『文章作法便覧』とかいった薄い副読本を読んでいた。文章を頼まれたプロセスを前置きとして長々と書くのは不細工なことだ、などと大事なことが簡潔に書かれていた。これも頭に叩き込んだ。図書室では、枕草子とか徒然草とか方丈記とか教科書に載らなかった部分を中心に赤い表紙の小学館の古典対訳を読んでいた。あと岩波新書。

◆昭和ポエマー少女

さくらももこが自分の高校時代の赤面ものの詩のノートのこと言及しているが、私もまた詩を書く少女だった。私の場合、長文をあまり読まないということは長文が書けない。詩は短い。入りやすい言語表現だと思う。



あの時代、少年少女詩人は普通にいた。浪人しているときにお金を出し合って2冊ばかりタイプ印刷の詩集を出した人たちを知っていたし、高校のときに個人詩集を出した人も知ってる。バンドやってる友人のオリジナル曲のために歌詞提供してた子もいた。ソフトボール少女だった姉でさえ寺山修司編集の少女詩集や中原中也詩集を持っていたくらいだ。

いっぱい読んで文学少女の城、文芸部など、敷居が高く畏れ多かったので、当時の学年誌に投稿をはじめた。最初に送った詩が選外佳作扱いで名前と題名が乗った。その次に送った詩が選者だった詩人の田村隆一氏の評とともに雑誌掲載され、学研からは図

書券を送ってきた。これに味をしめ、また何度か詩を送り、何度か掲載された。読んでなくても詩は書けるんだな、詩は図書券と交換できることもあるんだなと。

最初に掲載された詩は、短いので記憶している。こんな詩である。

***題**

「行く」

青い

みとじゅん線の列車は

一本つきり

きわみの駅に向かい

れいるのない地に行く

.....



16歳の宣言である。そのころ同級生に「みとじゅん」と呼ばれていた。姓名を続けて呼ばれるのはスヌーピーの飼い主チャーリーブラウンのようだが、わりと気に入ってた。悩みがないわけではなかった。年齢的に「圭子の夢は夜ひらく」(わかる人は古い)だと暗い人生の真っ最中である。60歳くらいまでは元気で生きるとあのころの自分に教えてやりたい。長丁場が待ってる、覚悟してかかれ、と。

たとえば彼氏と花火大会に行くのに着る浴衣を母親にねだる的な親孝行はまったくできなかったが、こうやって思い出を書いてみるとわりとリア充。基本ぐうたらな自分が高校皆勤だったのは、たぶん楽しかったんだと思う。

◆おそろべし『高3コース』

いつまでも高校生でいるわけにはいかない。国語(テストには長文は出ない)と化学(乙種危険物問題を解いて遊んでいた)以外はボチボチという学業成績の都合により進学先は限られる。とくになりたいものも思いあたらない。そのまま社会に出られる自分とも思えない。そんなとき、件の学年誌に、将来の適職についての択一式問診票みたいなものがついていて。書き入れて切手とともに送ると将来の適職が書かれて送られてくるといふものだった。面白半分に送って見たらこう書かれて帰ってきた。「編集者」。本

をあまり読まない私が将来本をつくることは予言されていたのだ。おそるべし（今はなき）『高3コース』。だがそのときは「なにそれ？」と思ったきり忘れていた。

たくさん入力（読書）しないと、自分の考えがうまく言い表せない。アイデアを文章化するためには、もっと読書が必要だ、と痛感したのは、さらに進学して郷里に戻り就職してからのことである。私に足りないのは読書だ。会社の昼休みに図書館に行って本を選び、通勤の電車の中で年間200冊くらい読んだ。あるとき、どの小説にもビジネス書にも絵本にもノウハウ本にもすべて同じことが書いてあるようにみえてきた。

「本のなかに答えなどない、自分で考えろ」と。

わかった。さらに読もう。それにしても就職してからメガネをかけるようになるとは学生時代に勉強してなかった証明みたいだ。だが20代前半の濫読が自分をつくっている。

時を経て、福岡の婚約者のところに遊びに行く。こんな私でも結婚相手は見つかった。印刷媒体のデザイン編集者なのだが、古い写真の写真集の仕事を引き受けたもののネガが汚いので修正に時間がかかりそうだと困っていた。

そこで私はネガを丁寧に水洗いし、水滴防止剤をつけて乾かしてみせた。完璧なネガフィルムが復元され、美しいプリント写真ができた。写真部出身が役に立った。その最初の仕事『大崎周水写真集』（葦書房）は福岡の図書館にもあるが奥付に私の名前はない。

その後、出版社でやっていく、という決意をして小社主力商品の「街道シリーズ（九州長州文化図録撰書1～9巻刊行：以後続刊）」を上梓するのは、さらに6年くらい後になる。

高校のころ頭に叩き込んだことはあとからジワジワ効いてくる。

それこそが有意義な高校生活ということなのだと思う。



サビエル高校 14 期生

図書出版のぶ工房 発行人 遠藤順子（旧姓：三戸）福岡市在住